

令和7年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業(統計情報総合研究事業))
研究報告書

International Classification of Health Interventions (ICHI) の

国内普及の更なる促進に資する研究

研究代表者 川瀬 弘一 聖マリアンナ医科大学理事

研究要旨:

WHO 国際分類ファミリー(WHO-FIC)は、その中心分類として疾病及び関連保健問題の国際統計分類(ICD)、国際生活機能分類(ICF)、保健・医療関連行為に関する国際分類(International Classification of Health Interventions: ICHI)の3つを設けており、共通のファウンデーションから用語を引き出すことで作成、各分類が密接に関連している。本研究の目的は、ICHI の開発ならびに国内普及の更なる促進を進めるために、継続的な教育、普及を行うスキームを確立することである。HIRG コンテンツ作業に本研究分担者の阿部幸喜氏が参加している。また 2024 年度、2025 年度とこれまで通り WHO-FIC ネットワーク会議に参加し、ICHI の最新情報を収集するとともに、我が国からの意見を提案している。

また ICHI の普及については 2024 年度、2025 年度と ICHI 研修会を計 5 回開催してきた。ICHI の Extension codes の付記を積極的に指導し、グループワーク研修を行い、多くの参加者から ICHI に対する積極的な質問が数多く寄せられた。特にこれら研修会を通じて、国内でのさらなる活用には ICHI 検索ブラウザの日本語訳は必須であると実感した。まずは、脳神経外科領域、整形外科領域、消化器外科領域から日本語訳を開始したいと考えている。その際に現在急速に進歩してきた人工知能(AI)も積極的に用いたい。

さらには「ICHI Reference Guide(ICHI 研修会用 2026 年)」の改訂作業を行った。今後 ICHI テキストの改訂は令和 8 年度上半期に行い、令和 8 年度の ICHI 研修会に間に合わせたいと考えている。

研究分担者

田中裕次郎・埼玉医科大学 小児外科 教授
岩中 督・東京大学医学部附属病院 名誉教授
波多野賢二・国立精神・神経医療研究センター 病院データマネジメント室 室長
高橋長裕・公益財団法人ちば県民保健予防財団総合健診センター 顧問
瀬尾善宣・社会医療法人医仁会中村記念病院 副院長
阿部幸喜・千葉大学医学部附属病院 次世代医療構想センター 特任准教授
小川俊夫・摂南大学 農学部食品栄養学科 教授

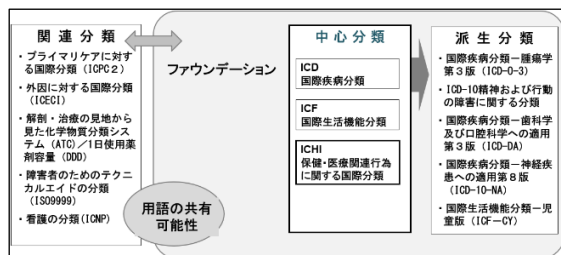
荒井康夫・北里大学 未来工学部データサイエンス学科 准教授

A. 研究目的

本研究の目的は、保健・医療関連行為に関する国際分類(International Classification of Health Interventions: ICHI)の我が国での活用方法を提案し、それらを活用して継続的な教育、普及を行うスキームを確立することである。WHO 国際分類ファミリー(WHO-FIC)は、その中心分類として疾病及び関連保健問題の国際統計分類(ICD)と国際生活機能分類(ICF)、ICHI の3つを設け、共通のファウンデーションから用語を引き出し作成、各分類が

密接に関連している(図1)。

図1. WHO 国際統計分類ファミリー(WHO-FIC) 中心分類である ICD、ICF、ICHI や派生分類は WHO-FIC のファウンデーションという共通の枠組みから用語が引き出されている



実際に各分類の併記の利用例(Use case)を集め、共有する作業が現在も進んでいる。ICHI は健康と福祉に関する情報および個人や集団に提供される医療行為に関する幅広い情報をコーディングすることで、標準化された共通言語として提供しており、近年中の世界保健総会(WHA)での採択が予測されている。

研究代表者および研究分担者は、これまで厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)で、WHO-FIC の年次会議、中間会議、ICHI Task Force 会議(ICHI 会議)に出席し、海外での活用事例など最新の情報を収集するとともに、我が国の知見を踏まえた意見提出を行ってきた。

ICHI の国内利用のためは、継続的な医療現場への教育・普及が必要である。令和2年度より「ICHI テキスト」を、令和4年度より「ICHI Reference Guide」の翻訳版を作成し、以後も改訂版を作成している。またこれまでこれら教材を用いてパソコンやスマートフォンを用いた ICHI コードの検索指導を中心とした ICHI 研修会も開催してきた。今後も日本全国で研修会を継続していく必要がある。

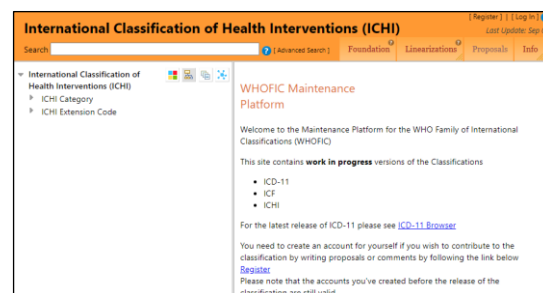
ICHI は単純な分類コードではなく、ICD や ICF とともに利用可能であり、さらに臨床現場や研究など様々な場面での使用も想定されており、多様な保健・医療関連行為を表現できるよう体系化されている。内容は ICD-11 と同様、膨大で、書籍などのテキストからコード検索を行うのではなく、ウェブサイトでの活用が必須で、WHO から「ICHI online」

(<https://icd.who.int/dev11/l-ichi/en>)が提供されている(図2)。

WHO の公用語は、英語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、アラビア語の6か国語であり、WHO から発出される ICHI を含む国際統計分類においても、公用語以外の翻訳は各国に任されている。これまで「ICHI Reference Guide」や ICHI Stem code の3つの軸(Target、Action、Means)の仮訳を行ってきたが、現在も毎年 Stem Code の修正、追加が行われており、ウェブサイトの日本語訳は進んでいない。ICHI の利用者の多くは診療情報管理士などの医療事務職であり、英語表記の ICHI 検索ブラウザを、翻訳機能を用いた利用法も含めて ICHI 研修会等で指導している。国内でのさらなる活用には ICHI 検索ブラウザの日本語訳は必須である。

図2. ICHI online

(<https://icd.who.int/dev11/l-ichi/en>)



B. 研究方法

1) ICHI の動向

ICHI の 2024 年、2025 年度の動向について WHO-FIC ネットワーク年次会議・中間会議での活動、および今後について記述する。

2) ICHI の我が国における活用と普及活動

我が国での ICHI の活用法を示し、さらに ICHI の継続的な教育、普及を行うスキームを確立する。

C. 研究結果

1) ICHI の動向

2024 年 5 月 13 日～17 日にメキシコシティで開催された WHO-FIC ネットワーク中間会議に、研究分担者である阿部幸喜氏は FDC および Morbidity Reference Group (MbRG) のメンバーとして対面で出席、本研究代表者である川瀬 弘一は Family Development Committee (国際分類ファミリー拡張委員会、FDC) のボードメンバーとして、そして瀬尾善宣氏は FDC のオブザーバー及び Education and Implementation Committee (教育普及委員会、EIC) のメンバーとして WEB で出席した。

ICHI は WHA での承認に向けて、様々な改良に努めてきている。ICHI 検索ブラウザの修正・構築の詳細が報告されたが、ICHI の開発段階は過ぎており、MbRG のような組織の立ち上げが必要ではないかとの意見もあった。また ICHI と ICD、ICF との併用、併記の利用例を集めて共有すべきという内容も議論された。また阿部幸喜氏より、日本の外科手術コードが ICHI に非常に近く、マッピングさせると 95% 以上変換可能で、完全一致させれば国際間での診療行為の比較が可能であると発信した。

2024 年 WHO-FIC ネットワーク年次会議は、

当初ルワンダ・キガリで 10 月 14 日～18 日の開催予定であったが、直前のマールブルグ病感染拡大によってキガリ開催は延期となり、急遽ジュネーブでのハイブリッド開催へ変更となり、本研究代表者及び研究分担者は WEB での参加となった。FDC 会議では ICF と ICHI についての調整と調和を取り決める作業が引き続き議論された。また FDC と Informatics and Terminology Committee (情報科学用語委員会、ITC) の合同セッションでは、ICHI については FDC で細かく制度を作成していく段階は済んでおり、今後はメンテナンスとして HIRG というレファレンスグループを立ち上げていくという報告があった。

2024 年の WHO-FIC 年次会議後より HIRG コンテンツ作業として、①maps of NCSP+ to ICHI、②ICHI Reference guide、③Education and information material、④Proposals on the platform、⑤Guidance for mapping to ICHI、⑥Content alignment and harmonisation) の 6 つの小グループで進められている。WHO 事務局よりメンバーの推薦依頼があり、Japan CC からは本研究分担者である阿部幸喜氏を推薦し承諾していただき、上記②⑤⑥の 3 つの作業分野に参加、今後は①にも参加予定である。

現在、②と③についてはほぼ完成し、②の ICHI Reference guide 作業では、2025 年 10 月に改訂版が公表された。⑥の「ICF に基づく ICHI ターゲット」と「ICHI の解剖学的ターゲットおよび ICD 解剖学エクステンションコード」についても確認作業を現在も継続している。

2025 年 WHO-FIC ネットワーク中間会議は 2025 年 3 月 31 日～4 月 4 日にルワンダで開催され、WEB で参加した。

2025 年 WHO-FIC ネットワーク年次会議は、米国の WHO 脱退表明の影響により、予算

削減等の影響もあり、10月13日～18日にジュネーブで開催(ハイブリッド開催)された。会議テーマは「WHO-FIC – Interoperability that Matters (WHO-FIC - 意味のある相互運用性)」で、本研究代表者である川瀬弘一はWEBで参加した。HIRGコンテンツ作業⑥において、ICHIにおいては、ICFに基づくICHIターゲットと、ICHI解剖学的ターゲットとICD解剖学的エクステンションコードの対応づけが進行中で、ハーモナイゼーションは概念・階層・重複領域の統合を目指して継続して検討されている。ICHIは近年中のWHAでの承認に向けて、様々な改良に努めてきている。ICHI検索ブラウザの修正・構築の詳細が報告され、またICHIとICD、ICFとの併用、併記の利用例を集めて共有すべきという内容も継続して議論された。

また研究分担者の阿部幸喜氏が、WHO-FICのポスターとして「Which scheme is suitable for a successor to the K-code in Japan, STEM7 or ICHI, in the spinal surgical field? -Mapping study from K-code to STEM7 and ICHI-(脊椎外科領域のKコードにおいて、外保連試案でコード化しているSTEM7とICHIのどちらが適切か? -KコードからSTEM7およびICHIへのマッピング研究-)」を提出したところ、プレゼンテーションの機会を与えられ、また発表内容も高評価であった。

2) ICHIの我が国における活用と普及活動

多くの医療関係の方にICHIに対する理解を深めてもらう目的で、2021年度から「ICHIテキスト」を作成している。このICHIテキストは、ICHIの基本概念およびその構造、そして136例の事例紹介の形式をとっており、執筆者は研究代表者、研究分担者だけでなく、

2019年にWHO-FICで行われたICHIフェース2テスト(ICHI-FiT)に参加していただいた診療情報管理士38名にも分担していただいている。現在ICDとICHIのExtension codeの共通化が急ピッチで進められており、ICHI onlineにおいてExtension code検索が令和7年2月より随時可能となっている。まだすべてのコードは振られていないが、現在はICD-11と同様に「Postcoordination」が掲載されるようになってきている。

今後136例の事例紹介例を、新たなExtension codesを付記した、改訂版「ICHIテキスト2026」を完成させたい。

我が国におけるICHIの普及のため、そしてより多くの理解者を増やす目的で、ICHI研修会を開催した。2024年度は、6月8日に札幌で開催された第171回北海道診療情報管理研究会学術集会において「医療行為の国際分類(ICHI)について」の講演をおこなった。ハイブリッド開催で、現地参加43名、WEB参加40名の合計83名の出席者に、ICHIの現状やウェブサイトを用いて(この時はスマホを用いて)のICHI検索法や、翻訳機能を用いた利用法も含めて指導した。

さらに2024年度はこれまで開催したことのない地域、千葉市、熊本市、仙台市の3カ所で開催(図3-2)、2025年度は都内1カ所と、これまで開催したことのない高松市で開催した(図3-3)。この研修内容はこれまでの厚生労働科学研究費補助金で作成した「ICHI Reference Guide」や「ICHIテキスト」を教材として用い、「WHO国際統計分類ファミリーについて」の講演と、「ICHIコーディング演習」という実習形式の研修内容とした。2025年度にはICD-11のコード検索に慣れた参加者も多く、Extension Codes検索が必要な事例を多く取り入れた。研修内容は「WHO-FICの中心

分類の1つである ICHI の現状」や「Extension Codes を中心とした検索方法」等の講演だけでなく、2025 年度からはグループワーク研修を行った。研修会開催 1 週間前に参加者に 9～10 問の例題を予め配布し、ICHI online を用いて導き出した ICHI コードを各自が準備し、3～4 名のグループ内で検討、その結果を発表していただいた。グループ演習では、疑問点や回答の導き方等に演習指導者が各グループに積極的に介入し指導した。その後、グループワーク演習の結果発表となり、質疑応答を研究代表者・分担者が解説し、回答結果を導くための回答例も配布した。

図3-1. ICHI 講演ならびに研修会
第 171 回北海道診療情報管理研究会 学術集会

会場	日時	場所	参加者
札幌市	6月8日(土) 15:00～18:00	株式会社モロオ 5階大会議室	ハイブリッド開催 (現地参加43名、 WEB参加40名)

図3-2. ICHI 研修会(2024 年度)

会場	日時	場所	参加者
千葉市	2月1日(土) 15:00～19:00	TKP千葉駅東口 ビジネスセンター	現地開催 (参加予定23名)
熊本市	2月22日(土) 15:00～19:00	TKP熊本カンファ レンスセンター	現地開催 (参加予定13名)
仙台市	3月1日(土) 15:00～19:00	TKPガーデンシ ティPREMIUM仙 台西口	現地開催 (参加予定13名)

図3-3. ICHI 研修会(2025 年度)

会場	日時	場所	参加者
東京	1月17日(土) 14:00～18:00	TKP新橋カンファ レンスセンター	現地開催 (参加19名)
高松市	1月31日(土) 14:00～18:00	TKP高松カンファ レンスセンター	現地開催 (参加14名)

また研修会終了後も、個別質問コーナーを設け、解説等で十分理解できなかった点を個々に指導した。

2024 年度は ICHI 研修会に参加した 35 名にアンケート調査をいただき(回収率 71.4%)、高い回答であった。年齢は 20～29 歳:3 名、30～39 歳:5 名、40～49 歳:10 名、50～59 歳:13 名、60～69 歳:4 名であった。勤務先は病院:30 名、大学・専門学校:3 名、医療関連企業:1 名、教育関連企業:1 名で、業務内容は、診療情報管理:22 名、医事、請求:8 名、経理、経営戦略:3 名、大学教員:2 名であった。

「ICHI について、これまで聞いたことがありますか？」の問いに対して「今回の研修会で初めて知った」9 名(25.7%)、「WHO-FIC の中心分類であることは知っている」24 名(68.6%)、「よく知っている」1 名(2.9%)、「ICHI フィールドテストに参加し、よく知っている」1 名(2.9%)、「ICHI フィールドテストにも参加し、よく知っている」1 名(2.9%)との回答があった(図 4-1)。

「ICHI Online は検索しやすいか？」の問いに対して、「検索しやすい」25 名(71.4%)、「検索しにくい」6 名(17.1%)、「コツが必要」1 名(2.9%)、「慣れが必要」2 名(5.7%)、「英語力が問題点」1 名(2.9%)と回答があった。

「和訳はどの程度必要か？(5 段階評価)」の問いに対して、「80～100%必要」20 名(57.1%)、「60～80%必要」7 名(20.0%)、「40～60%必要」7 名(20.0%)、「20～40%必要」1 名(2.9%)、「0～20%必要」0 名(0%)と回答があった。

「ICHI TEXT は分かりやすいか？」の問いに対して、「分かりやすい」32 名(91.4%)、「少し分かりにくい」2 名(5.7%)、「分かり難い」1 名(2.9%)と回答があり、「ICHI Reference

Guide は分かりやすいか？」の問いに対して、「分かりやすい」29 名(82.9%)「少し分かりにくい」5 名(14.3%)、「分かり難い」1 名(2.9%)と回答があった。

「今回の研修の難易度は？」の問いに対して、「易しかった 2 名(5.7%)、「ちょうど良かった」21 名(60.0%)、「難しかった」12 名(34.3%)と回答があり、「今回の研修の理解度は？」の問いに対して、「概ね理解できた」26 名(74.3%)、「理解できないところがあった」9 名(2.5%)の回答があった。

図 4-1. ICHI 研修終了後のアンケート調査結果 (2024 年度)

質問内容	ICHI研修会（千葉、熊本、仙台） （回答者：35名）
これまでに ICHI を きいたことがあるか？	初めて知った(9名：25.7%) WHO-FIC の中心分類であることは知っている(24名：68.6%) よく知っている(1名：2.9%) ICHI フィールドテストに参加し、よく知っている(1名：2.9%)
これまでに ICHI の 研修の経験は？	ある(18名：51.4%) ない(17名：48.6%)
ICHI の研修を受けた ことが「ある」と回答さ れた方は、その研修会 の種別を (複数回答あり)	日本診療情報管理学会の研修、 教育講演(18名：51.4%) その他の団体等による研修(2名： 5.7%)
ICHI 検索に使用した 端末は？ (複数回答あり)	パソコン(28名：80.0%) タブレット(7名：20.0%) スマホ(19名：54.3%)
ICHI Online は検索 しやすいか？	検索しやすい(25名：71.4%) 検索しにくい(6名：17.1%) コツが必要(1名：2.9%) 慣れが必要(2名：5.7%) 英語力が問題点(1名：2.9%)
和訳はどの程度必要 か？ (5段階評価)	80～100%必要(20名：57.1%) 60～80%必要(7名：20.0%) 40～60%必要(7名：20.0%) 20～40%必要(1名：2.9%) 0～20%必要(0名：0%)
ICHI TEXT は分かり やすいか？	分かりやすい(32名：91.4%) 少し分かりにくい(2名：5.7%) 分かり難い(1名：2.9%)
ICHI Reference Guideは分かりやすい か？	分かりやすい(29名：82.9%) 少し分かりにくい(5名：14.3%) 分かり難い(1名：2.9%)
今回の研修の難易度 は？	易しかった(2名：5.7%)、 ちょうど良かった(21名：60.0%) 難しかった(12名：34.3%)
今回の研修の理解度 は？	概ね理解できた(26名：74.3%) 理解できないところがあった(9名： 2.5%)

2025 年度も研修会終了後にアンケート調査

を行い多くの方から回答をいただいた(図 4-2)。

図4-2. ICHI 研修終了後のアンケート結果 (2025 年度)

【カテゴリ 1. 受講者属性】

◆ 1. 年齢 (n=15)

- ・50 代：6 件
- ・40 代：4 件
- ・30 代：4 件
- ・20 代：1 件

【保有資格(1-2)】

- ・理学療法士
- ・AIS コーディングプロバイダー
- ・看護師(保健師・助産師)
- ・個人情報保護士・医療情報技師

【勤務先(1-3)】

- ・大半が「病院」勤務者
- ・1 名「大学・専門学校」勤務

◆1-3-2. 業務内容 (n=15)

- ・診療情報管理：12 件
- ・臨床研究補助/データマネジメント：1 件
- ・医事請求：1 件
- ・診療部門：1 件

◆1-3-3. 実務歴 (n=14)

- ・10 年以上：8 件
- ・5 年～10 年：4 件
- ・3 年未満：2 件

「カテゴリ 2. ICHI に関する知識」

◆ 2-1. ICHI の認知度 (n=13)

- ・ICHI は WHO-FIC の中心分類であることは理解している：9 件
- ・ICHI-FIT にも参加して、かなり知っているつもり：2 件
- ・今回の研修会で初めて知った：2 件

◆2-2. ICHI 研修の受講経験 (n=15)

- ・ある:8 件
- ・ない:7 件

◆ 2-3. ICHI 研修の受講回数 (n=8)

- ・3 回以上:2 件
- ・2 回:4 件
- ・1 回:2 件

「カテゴリ 3. 環境」

1. 医学的知識に関する要望

・臨床理解の必要性

⇒術式や検査名から「どの部位に何を
しているか」を正しく判別する力が必
要

⇒カルテの内容から適切なコードを導
き出すための、基本的な身体構造
や治療法の学習

・教育の場の拡充

⇒養成校での教育、学会や生涯教育
の充実、診療情報管理士向けの付
加コースの設置

⇒自施設では経験できない「新しい技
術や手術」を学ぶ機会(学会発表な
ど)への期待

2. 現場の経験・運用に関する要望

・実践的な学習環境

⇒検索方法の基礎から、練習問題を用い
た実践的なトレーニングの実施

⇒仕事中に勉強時間を確保するのが難
しいため、自主学習できる環境整備

・システムの導入と加算

⇒ICHI を簡単に使用できるソフトの開発
⇒診療録管理体制加算の要件化など、
制度面での後押し

◆ 3-2. ICHI 研修の使用端末(n=15)

- ・PC:13 件
- ・タブレット PC:1 件
- ・スマートフォン:1 件

◆ 3-3. ICHI Online のコードの引きやすさ
(n=15)

- ・引きにくい:8 件
- ・引きやすい:4 件
- ・その他(慣れが必要等):2 件

◆ 3-4. 英語検索における和訳の必要性
(n=15) 【5:非常に必要 ~ 1:不要】

- ・スコア 5:10 件
- ・スコア 4:2 件
- ・スコア 3:3 件

「カテゴリ 4. 教材・運営」

◆ 4-1. ICHI TEXT 2022 の分かりやすさ
(n=14)

- ・分かりやすい:7 件
- ・少し分かりにくい:4 件
- ・分かりにくい:3 件

◆ 4-2. ICHI Reference Guide の分かりや
すさ (n=14)

- ・分かりやすい:5 件
- ・少し分かりにくい:8 件
- ・分かりにくい:1 件

◆ 4-3. 今回の研修の難易度 (n=14)

- ・ちょうど良かった:7 件
- ・難しかった:7 件

特に多くの方から、日本語対応の充実、特
に検索画面でコードによる検索ができるよう
してほしい、日本語で検索ができる機能を実
装してほしい、ブラウザの自動翻訳(Edge や
Safari)ではコードの表示が崩れたり、翻訳が
不自然になったりするため、公式な日本語版
Web サイトを構築してほしい、というご意見を
いただいた。

D. 考察

ICHI 開発が 2007 年にスタートして、今年で 19 年目を迎える。2019 年 7 月から 2020 年 2 月までに世界各国で行われた ICHI フィールドテストには、日本から 140 名が評価者として参加した。Public Health interventions (公衆衛生領域の保健・医療関連行為) については、標準的な言葉、用語に馴染みがなく、どの国においても正解率が低率であった。このためこの数年、WHO-FIC では公衆衛生領域の共通言語の開発、改善に積極的に取り組んだ結果、大部分の項目が追加・修正されている。今回の ICHI 研修会では、公衆衛生領域の例題も組み込んで、参加者に馴染んでいただけたらと考えたが、今後も継続していきたい。

ICHI コードは Stem code と Extension codes の組み合わせで構成されており、Stem code は 3 つの軸で表現されている。

Target (3 桁コード) は Action が実行される実態、Means (2 桁コード) は Action が実行されるプロセスと方法を示したもの、そして Approach (到達方法) の 3 つの軸から Health interventions の ICHI Stem code が作成されている。Target を大分類別に分けると「Interventions on body systems or functions (身体の部位あるいは身体機能の介入)」が 5,369 件、「Interventions on Activities and participation domains (活動と参加の介入)」が 1,004 件、「Environment (環境の介入)」が 2,528 件、「Health-related Behaviours (健康関連の行動への介入)」が 707 件で、合わせて 9,608 件になっている(図 5)。

図 5. Target 大分類別の ICHI Stem code

	Target 大分類別	ICHI Stem code 数
1.	Interventions on body systems or functions	5,369
2.	Interventions on activities and participation domains	1,004
3.	Interventions on the environment	2,528
4.	Interventions on health-related behaviours	707
	合 計	9,608

また Extension codes は、Stem code では十分表現できない、あるいは区別できない保健・医療関連行為を精緻化するためにとっても便利なコードで、Extension codes 付記することによって Stem code の詳細と粒度を拡張することができる。さらに Extension Codes は、3 つの中心分類の一貫性を確保するために、ツール環境を強化中で、現在は ICD-11 と同様に「Postcoordination」が一部掲載されるようになった。

Extension codes は 8 つの大分類に分けられ、「Additional descriptive information (付加的な記述、情報)」、「Assistive products (支援製品)」、「Essential pathology tests (診断のためのテスト)」、「Quantifiers (数)」、「Telehealth (テレヘルス(遠隔医療を含む))」、「Therapeutic products (治療用製品)」、「Anatomy and topography (解剖と部位)」、「Topology Scale Value (部位スケール値)」からなっている(図 6)。

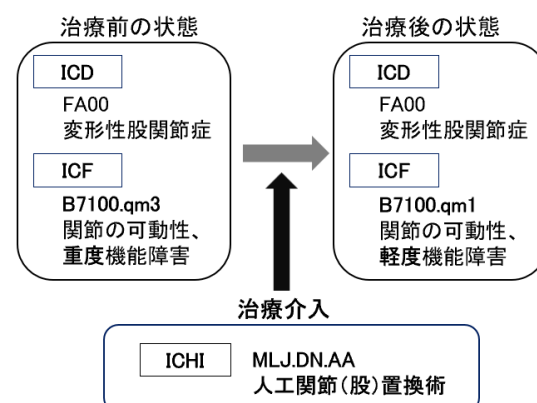
図 6. Extension codes

Extension codes 大分類	
1	Additional descriptive information (付加的な記述、情報)
2	Assistive products (支援製品)
3	Essential laboratory tests (診断のためのテスト)
4	Quantifiers (数)
5	Telehealth (テレヘルス(遠隔医療を含む))
6	Therapeutic products (治療用製品)
7	Anatomy and topography (解剖と部位)
8	Topology Scale Value (部位スケール値)

ICHI の Extension codes は WHO-FIC のファウンデーションという共通のストックから引き出すことが 2022 年の WHO-FIC ネットワーク年次会議で確認され、これにより ICD と ICHI の Extension codes の共通化が急ピッチで進められてきた。2025 年 1 月までは ICHI online で検索しても「No Code Assigned (コードが割り当てられていない)」と表示され、具体的なコードは振られていなかった。しかし 2025 年 2 月以降 ICHI online 上に一部の Extension codes が掲載されることになった。さらに現在では ICD-11 と同様に「Postcoordination」が一部掲載されるようになっていく。

また国際分類により表記のイメージを、研究分担者の阿部幸喜氏が ICHI 研修会での講演「WHO 国際統計分類ファミリーについて」内で、3つの中心分類の関係を提示している。具体的には変形性股関節症(ICD: FA00)、関節の可動性_重度機能障害 (ICF_ B7100.qm3)の治療前の状態が、治療介入として人工関節(股)置換術(ICHI_ MLJ.DN.AA)を行うことで、治療後の状態が関節の可動性_軽度機能障害(ICF_ B7100.qm1)となるというイメージである(図 7)。3つの中心分類が患者に対してどのように表現するかを分かり易く示している。

図 7. 国際分類による表記のイメージ図



ICHI の利用者の多くは診療情報管理士などの医療事務職であり、英語表記の ICHI 検索ブラウザを、翻訳機能を用いた利用法も含めて ICHI 研修会等で指導している。国内でのさらなる活用には ICHI 検索ブラウザの日本語訳は必須である。今後は、脳神経外科領域、整形外科領域、消化器外科領域から日本語訳を開始したいと考えている。その際に現在急速進歩してきた人工知能(AI)も積極的に用いたい。

E. 結論

2025 年に WHA において ICHI の承認が期待されたが、準備不足とのことで叶わなかった。しかしながら現在 Extension codes の具体的なコードが振られるよう進んでおり、近年中の WHA において ICHI の承認が期待できる。

WHA において ICHI が承認されると、ICD、ICF の中心分類が同じ土俵となり、これまで以上に世界中で利用されるようになると思われる。ICHI の我が国への活用と普及については、今後も多くの方に ICHI を理解していただけるよう「ICHI テキスト」「ICHI Reference Guide」を用いた講習会を継続し、これまでの経験を踏まえて、内容をブラッシュアップしていく予定である。そのために教育・普及の教材の基本

となる「ICHI テキスト」の改訂を今回の Extension codes の変更を踏まえて出来るだけ早く修正したいと考えている。

今後の最大の課題は、ICHI の日本語訳の作業であり、スピード感を持って対処したい。

F. 健康危険情報

特記事項なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Koki Abe, Hirokazu Kawase, Yoshinobu Seo, Osahiro, Takahashi. Mapping study from Japanese surgical procedure list STEM7 to ICHI. Workshop on International Classification of Health Interventions (ICHI) 16 – 19 November 2025 Kuwait City, Kuwait 2025 Nov.18
- 2) 荒井康夫:医療安全向上に貢献する診療情報管理の役割 医療 DX 時代の展望, 診療情報管理, 37(1) 39-47, 2025
- 3) 長谷部莉子、瀬尾善宣、内山拓也、千田絵里奈、筑野友也、山田鈴華、高島綾、小島夕風、中村博彦. 原発性脳腫瘍における ICD-11 導入に向けての課題. 診療情報管理, 37(1): 94-97, 2025
- 4) 阿部幸喜. 解説:精緻な死亡診断書の作成と死亡統計の特殊性と重要性 ～原死因の選択には丁寧な外因の記載が大切です～. 診療情報管理, 37(1):3-6, 2025
- 5) 川瀬弘一:ICHI 開発と今後に向けて. 診療情報管理 36(4): 3-4, 2025
- 6) 瀬尾善宣. ICD-11 と脳神経外科について. 診療情報管理 36(3): 40-48, 2024
- 7) 千田絵里奈、瀬尾善宣、長谷部莉子、村上宣人、岡亨治、中村博彦. ICD-11 導入前の対策について:頻出疾患である脳梗塞のコー

ディング不一致に関する検討.診療情報管理 36(1): 82-86, 2024

8) 瀬尾善宣. ICD-11 と脳神経外科について. 診療情報管理 36(3): 40-48, 2024

9) Abe K, Kawase H, Yokogawa N, Yamashita K, Yamashita M, Sasaki T, Yamaoka A, Shiga Y, Maki S, Inage K, Eguchi Y, Orita S, Ohtori S. Mapping the Japanese orthopedic association national registry (JOANR) to the international classification of health interventions (ICHI), Journal of Orthopaedic Science, 2023.
<https://doi.org/10.1016/j.jos.2023.01.002>

10) 川瀬弘一:我が国における ICHI 活用の可能性. 診療情報管理 35(1):23-32, 2023

11) 瀬尾善宣. 脳神経外科疾患について—ICD-11 を意識して. 診療情報管理 35(3): 3-6, 2023

12) 松本万夫, 稲垣時子, 河村保孝, 瀬尾善宣, 住友正幸, 海野博資, 川瀬弘一. シンポジウム2:ICD-11 の実際. 日本診療情報管理学会誌. 2022; 34(2): 13-39.

13) 川瀬弘一:保健・医療関連行為に関する国際分類(ICHI)の動向. 医学の歩み 283 (8):803-804, 2022

14) 川瀬弘一:「医療に対する私の思い」診療情報管理士と WHO 国際分類(WHO-FIC), HL7 FHIR. 神奈川県医師会報 884:35-38, 2022.

2. 学会発表

- 1) Koki Abe, H. Kawase, Y. Seo, O. Takahashi, K. Yoshimura, H. Iida, M. Inoue, Y. Shiga, K. Inage, Y. Eguchi, S. Orita, S. Ohtori. Which scheme is suitable for a successor to the K-code in Japan, STEM7 or ICHI? – Mapping study from K-code to

STEM7 and ICHI. WHO FIC Annual Meeting 2025, Friday 17th Oct 14:45 – 16:10 2025 Oct.17 (Oral presentation)

2) Koki Abe, Hirokazu Kawase, Yoshinobu Seo, Yukie Takahashi, Yuichiro Sakamoto, Yukihiro Ueno, Hidekazu Iida, Kensuke Yoshimura. Mapping emergency medicine procedures and interventions in Japan to the International Classification of Health Interventions classification WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2025 Apr 4 (Oral presentation)

3) 阿部幸喜. 整形外科の ICHI と、joint Use としての ICF への期待. 第 122 回診療情報管理士生涯教育研修会. 東京. 2025 年 3 月.

4) 阿部幸喜 教育講演「整形外科の ICHI と、Joint Use としての ICF への期待」第 122 回診療情報管理士生涯教育研修会 2025 年 3 月 22 日

5) 瀬尾善宣, 中村博彦. 脳神経外科と世界保健機関国際分類ファミリー(WHO-FIC)中心分類. 第 83 回日本脳神経外科学会学術大会. 横浜. 2024. 16~18

6) 瀬尾善宣. ICD-11 と脳神経外科について. 日本診療情報管理学会 第 119 回生涯教育研修会. 東京. 2024.7.

7) 阿部幸喜, 藤田香織, 松本万夫, 遠藤弘良, 鎌倉由香, 住友正幸, 瀬尾善宣, 高橋長裕, 塚本哲, 三木幸一郎, 牧田茂. 教育講演 ICD-10 から ICD-11 への移行に当たっての問題と教育 “Metastatic”の解釈のアンケート結果. 第 50 回日本診療情報管理学会学術大会. 福岡. 2024

8) 阿部幸喜, 高橋幸恵, 救急医療領域の手技・処置を対象とした国際分類 ICHI への

Mapping. 第 50 回日本診療情報管理学会学術大会. 福岡. 2024

9) Abe K, Fujita K, Suenaga H, Matsumoto K, Sumitomo M, Takahashi O, Endo H, Kamakura Y, Seo Y, Miki K, Makita S, Tsukamoto T, Akiyama J. Discrepancy between Japanese understanding and the principles of ICD-11 regarding the interpretation of the adjective ‘metastatic’WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING ,18 October 2024

10) Abe K, Kawase K, Seo Y, Takahashi Y, Sakamoto Y, Ueno Y, Iida H, Yoshimura K. Mapping emergency medicine procedures and interventions in Japan to the International Classification of Health Interventions classification. WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING ,18 October 2024

11) 阿部幸喜、吉村健佑、飯田英和. 救急医療分野の国内処置介入行為と国際分類 ICHI との mapping について. 第 83 回日本公衆衛生学会. 札幌. 2024

12) Seo Y, Takahashi O, Kawase K, Matsumoto K, Abe K, Nakamura H, Suenaga H. Consideration of anatomical classification axis related to the brain in the WHO-FIC Foundation, WHO Family of International Classifications Network Annual Meeting 2023, 2023/10

13) 荒井康夫. Kコードの分類体系の見直しに関する現状第 49 回日本診療情報管理学会学術大会. 十和田. 2023

14) 川瀬弘一. Kコードの分類体系見直しに

における外保連基幹コード(STEM7)、ICHI コードの検討. 第 49 回日本診療情報管理学会学術大会. 十和田. 2023

15) 瀬尾善宣. 脳神経外科手術における、Kコード、手術基幹コード(STEM7)、ICHI における相違点について. 第 49 回日本診療情報管理学会学術集会. 十和田. 2023

16) 瀬尾善宣、中村博彦. 脳神経外科手術における、Kコード、手術基幹コード(STEM7)、ICHI における相違点. 第 26 回日本臨床脳神経外科学会. 宇都宮. 2023

17) Abe K, Kawase H, Yokogawa N, Yamashita K, Yamashita M, Sasaki T, Yamaoka A, Shiga Y, Maki S2 Inage K, Eguchi Y, Orita S, Oteri S. Mapping the Japanese Orthopaedic Association National Registry (JOANR) to ICHI, WHO Family of International Classifications Network Annual Meeting 2022, 2022/10

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

特記事項なし

2. 実用新案登録

特記事項なし

3. その他

特記事項なし